

## 遥かなる日 少年の四季

藤田修三

今から60年以上も前、昭和30年代の始め頃の話である。

当時小学4年生位だった私は、とにかく勉強が嫌いで遊んでばかりいた。

その頃の記憶の一端を思い出すままに辿ってみたいと思う。

夏の炎天下で汗まみれになった赤銅色しんくういろの肌で、また冬の冷たいカラッ風の吹く中で手の甲にアカギレを作りながらも、四季が与えてくれる自然の環境そのものが、いつも私のフィールドだった。

小さな隙間から広大な空間まで、私達子供はそれぞれの工夫で自分好みの自作自演の遊園地にしてしまったのだ。

そうしたい思い出の片端を、それぞれの季節に重ねて拾ってみたい。

木々が色づき実りの季節を迎えると、まるでそれを待っていたかのように、私たちは他人の屋敷の中にまで侵入して葡萄や柿、ザクロ、胡桃などに至るまで、予め目を付けていたおいしそうな実をせしめようと狙った。木に登ったり、届かない高い所へは竹竿の先端をY字に割って作った即興の道具でひねって「禁断の果実」を取っては口の中に収めた。

法律的には明らかに窃盗である。

時々、家人に見つかって「コラッ」と怒鳴られ、一目散に逃げたが、向こうもそれ以上は追ってはこなかった。

突然だが、ここで話を少しの間令和の今にタイムスリップさせていただく。

我が家の庭には今年も沢山の柿が実った。

近隣の親しい方などに差し上げたり、遠くに住む息子の家族達にも送ったりしているが、それでも老夫婦？人だけではとても食べきれない量だ。

少子化で飽食の現代では、そんな柿の実でも竹竿を使って取ろうなどという悪ガキの姿などめっきり見られなくなった。

昼食後に妻が淹れてくれた茶を飲みながら、晩秋の午後の日差しの中で、窓越しに見える我が家の小さな庭の隅に立つ柿の木を眺めていたら、いつの間にかまどろんでいた。

僅かに時間が経過したようだった。

夢と現実との狭間の中で、柵を乗り越えて子供達が柿の実を取りに侵入してきた。

私がいきなり「コラッ」と大声で脅かすと、慌てて一目散に逃げる子供達。

その中の一人、坊主頭の後姿は、遙か昔の誰かに酷似していた。

「カマイタチ」

私が生まれ育った浜松地方は、冬になると「遠州のカラッ風」と言われる強く乾いた北西の風が吹く。当時、冬場の子供達の遊びといえば、道路に沿った小さな空地で、数人で競い合ったものが2つあった。

私達が「カッチン」と呼んでいたビー玉の当てっこと「ベッタン」と呼んでいたメンコである。

前の道路は当時まだ荷馬車が通っていた。

それらの多くは、荷台上に貨物を満載にしてJR（旧国鉄）浜松駅の構内にある集積場へと向かうものだった。「バックン・バックン」と鳴らす馬の蹄の音と共に、時々歓迎されざる置き土産として馬糞も落していった。馬糞はそのまま放置され、乾燥すると粉状の糞に戻り、それが風の中で舞い上った。

馬糞の粉は「カッチン」や「ペッタン」に夢中になって興じている私達にも容赦なく降り掛った。しかし、それよりもずっと気になるものが、時として襲来することがあった。

それは「カマイタチ」と言われて、子供達に恐れられていた。

風の強い日に、たまに発生するつむじ風の一種で、何らかの理由でそれが渦を巻いて小さな竜巻きのようになっ

中心部は真空になっているらしく、そこへ入ると露出した足などにあっという間に切り傷ができるというも

のだった。馬糞の粉が舞う中でも、勝負への拘りに腐心こたわしていた私達であったが、さすがにつむじ風らしきものが近くに発生すると「カマイタチだ」と叫んで、急いでその場から逃げた。

「カマイタチ」は沢山の馬糞の粉を上空に舞い上げながら、次第に遠くへ離れ、やがてパッと消えてしまった。

「カマイタチ」による被害を、私はついでに経験したことも、また見たこともないままに時が過ぎ、子供だっ



た私もいつしか大人に成長すると、やがて忘却の彼方へと去っていった。

しかし、子供心に恐れたあの「カマイタチ」の持つ神秘的なイメージを伴い、老境に入った今頃になって時折、巻き戻したモノクロフィルムの映像のように、記憶の中に蘇ることがある。

### しじみ売り

まだ明けきらない早朝から、我が家の前の道は様々な人達が通り過ぎた。

新聞配達達の自転車のブレーキの音がして新聞受けに落し込む音。

荷台の木箱の中で牛乳瓶が揺れる音。

納豆売りの掛け声。

それらの音や声は、一日の営みのスタートを告げる音でもあった。

そんな音や声を、私は布団の温もりの中で、ぐずぐずといつまでも起きられないままに聞いていた。

ある朝私は、めずらしくいつもよりも早く目が覚めて起床できたので、家の外の道に出てみた。

すると、朝もやの中をしじみ売りがこちらに近づいて来るのが見えた。

老朽化して今にも壊れそうな乳母車にしじみを積んで、2人の老夫婦が手で押していた。

おじいさんは目が不自由らしく、乳母車の端をしっかりと両手で握り、隣でその妻と思われる腰の曲がった

おばあさんが上から手を添えて誘導していた。

「しじみー。取りたてのしじみー」

私は母にせがんで、急いで鍋を手に味噌汁用にと、そのしじみを自ら買い求めた。

新鮮なしじみはおいしいと家族にも好評で、その後も何度かその老夫婦からしじみを買うことになった。

一つ、気になることがあった。

乳母車の中には、いつもしじみがまだ一杯積まれていた。

朝の内にこのしじみを全量捌さばききるのが容易でないことは、子供の私にも想像できた。

ましてや目の不自由な夫を伴い、腰の曲がった老体に鞭打っての行商であれば、なおさらのことだろうにと。

桜の花も散って、早朝の日差しもすっかり明るく穏やかになってきた4月中旬の頃だった。

このしじみ売りの老夫婦が交通事故に遭い、おばあさんが亡くなったことを、翌日の新聞を読んだ母から教えてもらって知った。

それ以降、しじみ売りが2度と我が家の前を通ることはなかった。

一人残されたあの盲目のおじいさんは、どうなってしまったのだろうか。

子供心に、私は老夫婦へ切なく思いを馳せたのだった。

#### 茜雲の彼方に

うっとおしい梅雨が明けると、待ちに待った夏休みだ。

目一杯夏休みを満喫するために、私は学校から課せられた2冊のドリルを7月中に済ませ、日記さえもルールを無視して「先行して」書き溜めた。

だから8月に入ると、来る日も来る日も朝から晩までプールや川、時には自転車で海まで遠征して泳いだり釣りをしたりして過ごした。

そんな夏休みも盆が過ぎて残り少なくなったある日、私は自宅から自転車で半時間程の川へ一人で釣りに出掛けた。

土手の上に自転車を寝かせ川辺へ下りた。

この場所は私の秘密の場所で、今までも何度も来たことがある絶好のポイントだった。しかし、その日はなぜか魚の食いが悪く、浮きも一向に沈まなかった。

いつの間にか日が西へ傾き、川面を渡る風も心なしか涼しくなってきた。

仕方なく私はその日の釣果を諦めて、道具を片付けて、土手の上へ登っていった。

そして、自転車に跨がろうとした時、辺り一面が橙色に染まっていることに気づいた。

西の空を見上げると真赤な夕焼けだった。

地平線の彼方に、今まさに沈まんとする途方もなく大きな太陽が、くっきりとした輪郭の端を、音もなく僅かに震わせている。

見上げれば、西の空から頭上にまで広がったウロコ雲も、全てが橙色に染まっている。

そのあまりの美しさに、私は言葉も発せないまま、ただ呆然と、パノラマのような空を眺めていた。

太陽はいよいよ3分の2程、地平線の向こうに沈みかけようとしていた。

私は夕日を全身に受けながら、身も心も染まってしまったようだった。

あの地平線の向こう、夕暮れの茜雲の彼方には、一体何があるのだろうか。

ようやく思春期に入りかけたばかりの、日に焼けた少年の心は、未来への漠然とした期待と不安の入り交った得も言われぬ感動のようなもので、頭の中がはち切れそうになっていた。